

【2015年文化の越境とジェンダー国際シンポジウム in 上海 研究発表 要旨】

小学校外国語活動教材におけるジェンダー描写

渡部孝子

1. はじめに

日本の喫緊の教育課題の一つとして挙げられているのが、グローバル人材の育成である。「グローバル人材とは何か」と論じる場で、必ずキーワードとなるのが英語力である。長い議論を経た後、中央教育審議会による「社会や経済のグローバル化が急速に進展し、異なる文化の共存や持続可能な発展に向けて国際協力が求められるとともに、人材育成面での国際競争も加速していることから、学校教育において外国語活動を充実することが重要な課題となっている」という答申を受け、2011年に小学校における外国語（英語）活動が必修となった。

日本が育成しようとしている「グローバル人材」は、外国語コミュニケーション能力だけではなく、「異なる文化を理解し、異文化の良さを活かす」能力、そして「職業人」としての能力を備えている人材である（Yonezawa 2010）。小学校外国語活動が必修化され、今後我々が目指すべきは、子どもたちが将来、国内外、いかなる場所で働こうとも多文化状況に適応できる、あるいは堪えうる力が持てるように導くことではないだろうか。さらに、グローバル人材となる職業人の育成という観点からも、学校教育現場において、キャリア選択の可能性を狭めないための教育的配慮がこれまで以上に必要となってくるだろう。新設された小学校外国語活動の教材には、キャリア意識形成に影響するかもしれない性別役割分業や職業に関する描写や言語表現はどのように存在するのだろうか。

2. 先行研究

これまで日本の英語教科書をジェンダーという視点で分析した研究は少なくない。例えば Sano, et.al.(2001)は、中学校と高等学校の英語教科書を言語使用や使用者及びトピックの観点から分析している。Sano, et.al.の研究では、表面上の言語レベルでは統計的な有意差が見られなかったとしているが、言外に含まれたメッセージの中に偏った観念が示されていた教科書があったとしている。例えば、choose や decide という意思決定に関わる場面では、その発話者は男性であることが多いなどが挙げられている。また、中学校英語教科書を機能文法という観点からジェンダー・バイアスの分析を行った鈴木（2005）も、「動的・自発的な性質の強い行為をおこなう人物（行為者）は、女性よりも男性として描かれていることが圧倒的に多い」と指摘している（p.26）。さらに、Mineshima(2008)は、高等学校の英語教科書を可視化できるジェンダー、性格や特徴、会話という観点から分析している。

しかしながら、これまで小学校外国語の教材をジェンダーという観点から分析した研究は見当たらない。そこで本研究では、小学校英語教材に焦点を当て、小学校国語教科書と比較しながら、性別役割分業や職業の描写を中心にジェンダーの観点から分析を試みた。

3. 研究方法

現時点では小学校で「外国語活動」は教科ではないため「教科書」はない。しかしながら、文部科学省は教材として『英語ノート 1』『英語ノート 2』（教育出版 2009）、その後続く『H, Friends. 1』『Hi, Friends. 2』（東京書籍 2012）を全小学校児童に配布している。これら小学校外国語活動の教材には文字言語はほとんど扱われていないため、イラスト、トピック、登場人物、リスニング・

スクリプトをデータとして質的な分析を行い、そこで見られたジェンダー描写について、小学校国語科教科書との比較を試みた。本研究では、特に性別役割分業や職業の描写を中心に分析し、また、そのジェンダー描写が小学校国語科教科書に描かれるものと異なるのか否かも点検した。

#### 4. 結果と考察

『Hi, Friends. 2』では、第7課に「We are good friends」というトピックで、桃太郎が題材として取り上げられている。そこでは、男女の性別役割分業がイラストや単語の使用に明示的に見られる。また、軍国主義を連想させるために小学校国語科教科書では扱われていない題材を外国語活動の教材で取り上げていることは、小学校教育の一貫性が問われることになるだろう。

さらに、小学校国語の教科書で扱われている物語と重複するものは、『大きなかぶ』『三年峠』『スーホーの白い馬』などが挙げられる。国語科教科書に外国の童話を教材として取り入れ、「日本語」を通して外国文化の理解を深める学びを提供していることになる。また、外国語活動では、「英語」を通じた新たな学びが期待できる。しかしながら、その中に見られる性別役割分業の描写は固定的であり、共通点が多く見られる。

一方、外国語活動の教材の中の職業描写については、固定観念的なジェンダーとジェンダー・フリー教育を意識した描写が混在していることがわかった。

#### [参考文献]

- Mineshima, M. (2008). Gender Representations in an EFL Textbook. *Bulletin of Niigata Institute of Technology*. No.13 pp.121-140.
- Sano, F. et.al. (2001). Gender Representation in Japanese EFL Textbooks. *PAC3 at JALT 2001 Conference Proceedings*. pp.899-906.
- 鈴木卓 (2005). 「中学校英語教科書におけるジェンダー・バイアス—機能文法を用いた分析—」『フェリス女学院大学文学部紀要』40号. pp.19-28.
- Yonezawa, A. (2014). Japan's Challenge of Fostering "Global Human Resources": Policy Debate and Practices. *Japan Labor Review*. vol.11. No.2. pp.37-52.

(わたなべ たかこ・群馬大学教授)